

●「赤心」がん

Dream

五代塾

Godaijuku

Sinbun (新聞)

第 21 号

発行：Dream 五代塾

吹田市千里山西 5-14-17

発行責任者：理事長 川口 建

令和三年（二〇二一）十一月に「五代友厚開拓使官有物払い下げ説見直しを求める会」（以降「求める会」）が、五代友厚を「開学の祖」とする大阪市立大学の関係者を中心として結成された。そして高校日本史教科書各社と『日本史年表』を刊行する岩波書店に対して開拓使官有物払い下げ事件の五代友厚に関する記述の訂正を求めた。その要望の根拠は、国立公文書館が所蔵する政府決定資料では払い下げ先は「開拓使官吏が退職して設立する民間会社」となっており、五代への払い下げ説は明治十四年七月二十六日の東京横浜毎日新聞の誤報を鵜呑みにした結果、とするものであった（本紙第三号参照）。こうして五代友厚名誉回復活動が始まった。

Dream 五代塾顧問 八木孝昌

日本史教科書第二次記述訂正実現 五代名誉回復活動、遂に決着へ

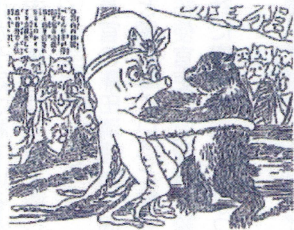
第一次回答と記述訂正内容

教科書の従来記述は、「開拓使の廃止を前に、長官黒田清隆は同じ薩摩出身の政商五代友厚に約二〇〇万円を投じた事業を三八万円という不当に安い価格で払い下げようとして問題になった」とであった。訂正の要望書に対して、教科書会社五社中四社が従来記述を訂正すると「求める会」に回答してきた。令和四年（二〇二二）秋のことであった。また岩波書店からは、「五代への払い下げ政府決定」が事実ではないことを認めて、「次回増刷時に訂正」との回答があった。

翌令和五年（二〇二三）四月から使用される新しい『日本史探究』において、山川出版社・清水書院・実教出版・第一学習社の四社が従来記述を訂正した。ただし、訂正の内容は三つに分かれた。

まず山川出版社と清水書院は「開拓長官黒田が同じ薩摩藩出身の政商五代に格安で払い下げようとしている」という趣旨の訂正をした。これは従来記述に「新聞が報じて」を挿入しただけの訂正であったが、東京横浜毎日新聞が五代への払い下げの動きを報じたのは事実であったから、この訂正によって、従来の間違い記述が事実の記へと転換した。

●開拓長官の黒田清隆が、同じ薩摩藩出身の五代と密着していると批判されたが、実際は開拓使官吏が退職して設立する予定の民間会社に安価で売却しようとした。



▲明治十四年の政変の風刺画（同画は明治十一年十月号）黒田清隆（タコ）と大隈重信（ウマ）の対決をあらわしている。

第一学習社
令和 6 年版「高等学校 日本史探究」

には、その報道が誤報であったことを付記する必要があったが、その付記はなかった。（なお、「求める会」から清水書院の編集担当者へ電話で記述訂正の礼を述べたところ、「要望書は受け取っているが、記述訂正は当社独自の判断であり、要望されたからではない」との返答があった。）

実教出版『日本史探究』の記述は「薩摩出身の開拓長官黒田清隆は、開拓使の官営事業を、開拓使官吏が設立を計画していた会社や、同じ薩摩出身の五代友厚らが経営する関西貿易社に、安い価格で払い下げようとした」と訂正して、「開拓使官吏が設立を計画していた会社」への払い下げを記述したものの、「五代の関西貿易社への払い下げ」も行われようとしたことにしたため、不可解な記述となった。

第一学習社は「二八八」（明治一四）年、北海道開拓にかかわる鉾山、工場などの官有物の民間への譲渡をめぐる、自由民権派は政府を激しく非難した」とし、注で「開拓長官の黒田清隆が、開拓使の官営事業全部を、開拓使官吏が退職して設立しようとした民間会社に

ただし、五代への払い下げが否定されたわけではなかった。五代無実を明確にするためには、その報道が誤報であったことを付記する必要があったが、その付記はなかった。（なお、「求める会」から清水書院の編集担当者へ電話で記述訂正の礼を述べたところ、「要望書は受け取っているが、記述訂正は当社独自の判断であり、要望されたからではない」との返答があった。）

実教出版『日本史探究』の記述は「薩摩出身の開拓長官黒田清隆は、開拓使の官営事業を、開拓使官吏が設立を計画していた会社や、同じ薩摩出身の五代友厚らが経営する関西貿易社に、安い価格で払い下げようとした」と訂正して、「開拓使官吏が設立を計画していた会社」への払い下げを記述したものの、「五代の関西貿易社への払い下げ」も行われようとしたことにしたため、不可解な記述となった。

第一学習社は「二八八」（明治一四）年、北海道開拓にかかわる鉾山、工場などの官有物の民間への譲渡をめぐる、自由民権派は政府を激しく非難した」とし、注で「開拓長官の黒田清隆が、開拓使の官営事業全部を、開拓使官吏が退職して設立しようとした民間会社に

記者会見とマスメディアの報道

不十分であるとはいえ、五代を悪徳商人であるかのように扱う教科書記述の訂正が行われ、そこに風穴が開いた。「求める会」代表の児玉隆夫同窓会五代委員会委員長と同委員の八木孝昌は三月二十三日に文部科学省において記者会見を行った。

その内容はまず四月十一日の関西テレビの「news ランナー」で放送され、翌四月十二日の朝日新聞朝刊には「五代友厚 濡れ衣だった『汚点』 官有物払い下げ『無関係』教科書修正」の見出しのもとに編集委員の署名記事が載った。続いて四月十九日の読売新聞夕刊には「五代友厚 一四〇年の汚名返上 官有物払い下げ 教科書修正 大阪市大同窓生らの働きかけ実る」の見出しで教科書書替問題が報じられた。さらにこの問題は産経新聞・日経新聞でも文化欄的な紙面において大きく取り上げられた（本紙第十四号参照）。

第二次記述訂正の要望

「求める会」は同年六月、各社の令和五年度版『日本史探究』の記述訂正では五代の名誉は回復されたことにならないとして、第四次要望書を送った。山川出版社・清水書院・実教出版の三社には、

②東京横浜毎日新聞が五代友厚への払い下

げを報道したが、それは誤報であったこと。

②政府決定の払い下げ先は開拓使官吏が退職して設立する予定の民間会社であったこと。

を記述するように求めた。

第一学習社に対しては、自由民権派の政府批判が五代への払い下げ反対という趣旨で行われたことを明記するよう求めた。そして、記述訂正をしなかった東京書籍には他社が訂正に依拠していることを伝え、上記①②の記述訂正を行うよう求めた。

これに対して、山川出版社・清水書院・第一学習社の三社からは第二次訂正を行う旨の回答があった。実教出版からは、内部検討したものの、意見がまとまらなかったため、次年度教科書での記述訂正は断念した、との通知があった。

また、記述訂正をしなかった東京書籍には、他社の動向を伝えて記述訂正を求めたが、従来判断を維持するとの回答があった。

出揃った第二次記述訂正

日本史教科書会社最大の山川出版は、『詳説日本史(日本史探究)』の令和六年度(二〇二四)版において以下のように記述訂正した。

一八八一(明治一四)年、旧薩摩藩出身の開拓長官黒田清隆が、同藩薩摩出身者らに北海道の開拓使所属の官有物を不当に安い価格で払い下げようとしていると報じられ、問題化した。明治十四年の政変で払下げは中止された。

これは前年の記述から「政商五代」と「関西貿易社」を消去しただけの内容である。これによって五代の名譽を損なうという問題は免れるけれども、「日本史の山川」という評価を得

ている代表的出版社が焦点を回避するかのようない記述訂正でよいのかという疑問が残る。ただし「求める会」は教科書記述の水準を論議する会ではないので、この訂正を諒とすることとした。

清水書院『高等学校日本史探究』の第二次記述訂正は次のようであった。

黒田は開拓使が約二〇〇万円投じた事業を守るため、三七万円余という不当に安い価格で、同じ薩摩出身の政商五代友厚の経営する「関西貿易社」に払い下げようとしていると新聞が報じて問題化した。しかし、関西貿易社が希望した開拓使官有物の払い下げは二件のみで、多くは別の会社払い下げられることとなった。結局、明治十四年政変で開拓使官有物の払い下げは中止されるとともに、開拓使も予定通り廃止された。

確かに関西貿易社は二件の物件の申請はしているけれども、政府決定においては払い下げ物件の中に含まれていないので、払い下げに関して上記のように言及するのは事件の理解を混乱させることになる。また、「多くは別の会社払い下げられることとなった」という書き方も正確である。手前の文が「新聞が報じて問題化した」とあるので、その結果として「別の会社払い下げられることとなった」と読まれる可能性がある。事実関係はそうではなく、最初から「別の会社払い下げられることになった」のである。そのような問題点はあるけれども、一応合格点である。

第一学習社『高等学校 日本史探究』を見る。

一八八一(明治一四)年、北海道開拓にかかわる鉱山・工場などの官有物の民間への譲渡をめぐり、政商の五代友厚へ安価での

払い下げが予定されていると新聞が報じたため自由民権派は政府を激しく非難した②。(注②の説明として)

開拓長官の黒田清隆が、同じ薩摩藩出身の五代と癒着していると批判されたが、実際は開拓使官吏が退職して設立する予定の民間会社に安価で売却しようとした。

これが開拓使官有物払い下げ事件の説明として最もすぐれた記述である。開拓使事件記述史上の記念碑とも言うべき、決定版の記述訂正が遂に出現した。関係各位に対して深い敬意を表するものである。

乱立する記述とその意味

なぜ山川出版社や清水書院は、東京横浜毎日新聞の記事が誤報であったと書くことしなのか。誤報であると明記すれば、従来教科書が誤報を真実と取り違えてきたことを認めることになるからであろうか。大切なのは教科書で学ば高校生たちが何を伝えるかであり、立場とかメンツとかの問題ではないはずである。

以上の結果、一つの歴史的事実について相互に異なる五種類の記述が乱立し、そのすべてが「文部科学省検定済」として高校生たちに示されることになるという、前代未聞の事態となった。しかし、「政商五代へ払い下げられよう」として問題になった」という過去の各社横並びの記述からすれば、画期的な進展である。これは将来において第一学習社の記述が標準となり、そこへ集約されるように各教科書が変わっていく、その過渡的段階を示しているのを見てよいであろう。

折しも、予期しない取材が読売新聞東京本社文化部の記者から筆者に対してあった。そして一か月後に全国版の記事が出た。

読売新聞記事「五代友厚の実像」

各日本史教科書の動向が上記のように明らかになった段階で、令和六年(二〇二四)六月二五日の読売新聞夕刊が「日本史アップデート」という全国版の連載企画において、「五代友厚の実像」「政商」の悪評は誤報から」の見出しを付した、多可政史の署名入り記事を掲載した。二千字に及ぶその記事は次のようなリード文で始まる。

明治の実業家、五代友厚には「開拓使官有物払い下げ事件」で、国有財産の払い下げを不当に安く受けようとした「政商」の悪評がある。だが、五代を批判した当時の新聞記事などの検証が進み、実態が異なることが分かっていく。

記事は、「五代への払い下げ」を報じた新聞記事が誤報であったと断定している。その上で、日本史教科書の記述訂正について具体的に



読売新聞「日本史アップデート 五代友厚の実像」

な例示をして、次のように締めくくる。

近年、五代の名譽を回復しようという活動が、五代が設立した「大阪商業講習所」が前身の大阪市立大(現・大阪公立大)の関係者によって進められた。教科書会社に見直しを求めた結果、官有物払い下げ先を「開拓使官吏が退職して設立する民間会社」に改めるなど、史実に沿った記述に変わりつつある。

五代が大阪の発展のために成し遂げた事業は、枚挙にいとまがない。活動の中心を担う大阪市立大OBの八木孝昌さん(83)は「政商の悪いイメージが流布され、立派な功績も打ち消されてきた。ようやく五代さんの正当な評価がされてきたと実感しています」と話している。

昨年来の一連の報道の総まとめというべき本記事は、私たち「求める会」が読売新聞社に対して働きかけたり、資料提供して記事にすることを要望したものではない。まったく独自に企画されたものであり、記事中、末岡照啓住友史料館研究顧問と久保田哲武蔵野学院大学教授への取材も、「求める会」からの推薦や紹介によるものでなく、記者独自の選択によるものである。

トドメの一撃

それにしても時宜を得たこの記事は、一つの歴史的事実の説明として相互に相異なり、あるいは相反する五種類の教科書記述が入り乱れるという事態へのトドメの一撃となる観がある。動かしがたい『世論』となろうとしている五代無実を前にして、五代への払い下げという謬説に固執している東京書籍は、時間の問題で記述訂正に踏み切らざるをえないだ

ろう。記述訂正を中途半端な状態にとどめている教科書会社も同様である。

振り返れば、五代友厚名誉回復の活動は、「学問」の世界が関係するという理由によって、容易なものではなかった。しかし、「この現状は放っておけない」と考えてくださる大勢の方々のお力添えによって、所期の目標へと到達することができた。各位にお礼を申し上げつつ、奇蹟とも言える教科書書替成就の報告とさせていただきます。

「椰子の実」 唄 柳 兼子 幼い日 戦前のシドニーでの 思い出の旋律

Dream 五代塾顧問 曾野豪夫

名も知らぬ遠き島より
流れ寄る椰子の実一つ
故郷の岸を離れて
汝はそも波に幾月

作詞 島崎 藤村 明治三十三年
作曲 大中 寅二 昭和十一年



母と大川町の自宅のピアノと難しそうな楽譜。ピアノの上のレースは自作。1926 年前後・大正末～昭和初め頃

母・慰(やす)は日本銀行大阪支店の南側を流れる土佐堀川の対面の太川町で明治四十二年に生まれました。五代友厚が亡くなって二十四年経っていました。養嗣子の五代龍作・武子夫妻は健在でした(本紙十四号)。母の生家は、スポーツ店ミズノ大阪本店の西側約二〇〇メートルの現在の住友ビル

母はそこから徒歩五分の愛日(あいじつ)小学校に通う「こいさん」でした。船場言葉で次女のことをそう呼んでいました。谷崎潤一郎の『細雪』(ささめ雪)に長女「いとさん」とともによく出てくる呼び名です。『細雪』の内容は(私が生れて三年後の)昭和十一年秋から大東亜戦争の始まる十六年春までの四年半の間の大阪の旧家を舞台にした小説です。戦争中に月刊誌『中央公論』に連載が始まりましたが、軍部から「内容が戦時にそぐわない」と掲載を止められ、戦後に連載が再開されると、今度はGHQによる検閲を受け、戦争肯定や連合国批判に見える箇所などの改変を余儀なくされた曰くつきの小説です。



柳兼子独唱会 大手前高女公堂にてピアノ松村順吉、大正 14 年 (1925) 母が大手前高女 5 年生の時

母は府立大手前高女に進み、学校のピアノの松村順吉先生に個人レッスンを受け、また「日本声楽の母」とのちにいわれた上野音楽学校卒で同校教授だったアルト歌手柳兼子先生の出稽古に師事して声楽を習っていました。大正十五年(昭和元年)、母は翌年女学校卒業を控えて実母の綾(五代友厚の娘武子藍子と従姉妹関係、私の外祖母)が未婚の子供十人を残して他界しました。家には女中や男衆(おとし)など数名がおり何不自由のない生活でした。しかし母は六人の妹と弟の母親代わりをするために希望していた大阪音楽学校(現在の大阪音楽大学)への入学を断念しましたが、卒業後も両先生に師事していました。(四年後、外祖父省一が五代さんと縁のある人を後妻に娶った話はいつか機会があれば書きましょう。)

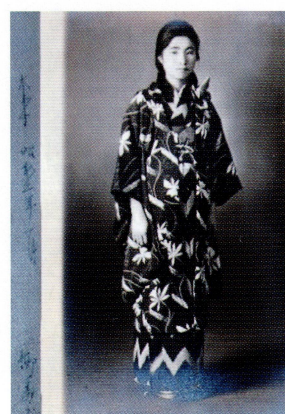
母の一歳年少の妹(私の叔母)は梅花高等女学校を卒業しました。昭和三年に大阪音楽学

校に入り二年間通いました。九十四歳まで長寿だった叔母の話によりますと、実家には当時すでに市内に三つしか残っていなかった珍しい江戸時代以来の「火の見(やぐら)」が二階の屋根の上にあり、そこでよく兄弟姉妹が集まって歌を唄っていたそうです。

今回改めて柳兼子のLP盤とCDの解説に目を通してみました。日本の曲は皆さまにも馴染みの深い曲が多く収録されています。「月見れば」、「久方の」、「花の色は」、「早春賦」、「平城山(ならやま)」、「荒城の月」、「浜辺の歌」、そして「椰子の実」……(作詞者、作曲家の名前は失礼ながら割愛)。また松橋桂子の著書に柳兼子の昭和三年ベルリンでのヴェルデイのピアノ演奏による独唱会のプログラムが載っています。二十余曲はドイツ・リートの名曲ばかりです。ベートーヴェンの「われなれを愛す」、シューベルト「野ばら」、ブラームス「永遠の愛」、ヴェルディ「日光」やシュトラウスの「懐かしき まぼろし」……

母の写真アルバムには藤原義江、伊沢蘭香、花はるみ、日下ヨランダ、岡田嘉子、レオニード・セフチューク(オランダの青年提琴家)などのプロマイドが貼ってあります。箱の中に入っていた多くの音楽会や歌舞伎、芝居や宝塚歌劇などのプログラムなどは、家が小さくなるたびに捨ててしまいました。

シドニーで生れ育った私は、現地の幼稚園から小学校に進みました。日本から女中さんがきていたので自宅では日本語で過しました



母慰(やす)のポートレート。左下に芸名「柳 兼子」と自署している。昭和 2 年(1927)1 月

が一応バイリンガルでした。私は昼寝をしな
がら、或いは夜寝る前に母のピアノや静かな
歌声を聞きながら妹と寝についたのです。
「椰子の実」などはその頃になじんだ曲でし
た。

昭和十六年四月、日本は米英蘭などの貿
易が途絶し、大東亜戦争開戦の半年余り前に
私たち家族は引揚げのためシドニーから四週
間の航海を経て神戸港に着き、御影に住むこ
とになりました。四年間近い戦争を経て、戦後
の混乱期に母は東京の柳兼子先生と再会する
機会はなかったと思います。敗戦後数年して
母は結核を患い私の灘高での生活の三年間を
甲南病院との入院を繰り返して亡くなりました。
父は海軍軍属として南太平洋で戦死して
いました。

妹が高校を卒業して娘時代の昭和三十年代
のことです。阪急六甲駅から友人数名と電車
に乗っておしゃべりをしていました。気がつ
いたらすぐに次の御影駅に着いたので「じゃ
ーばいばい！」といってあわてて一人で下車
しました。と、車内に残っていた友だちに一人
の老婦人が足早に近寄ってきました。「今、降
りられたあの娘さんは、曾野さんのお嬢様で
すか？あーそう、やつぱりー私はむかし、あの
方のお母様が娘時代に音楽を教えていたのだ
ですよ。余りよく似ていらつしやったので……
よつこのことでお話しが出来ず残念でした
わ。」

昭和五十九年（一九八四）、五十歳、私は兼
松北京駐在員事務所長をしていました。数日
遅れで届く日本からの新聞の死亡記事を見て
飛びあがらんばかりに驚きました。「柳兼子逝
去、享年九十二」。まさか母が娘時代に師事し
た先生が未だご存命だったとは！しまった、
もう少し早く気がついていたら東京目黒区駒
場にあるご自宅を妹と一緒に訪問してお会い
できたのに。（私も来年同じ年となる……）

柳兼子先生のご主人柳宗悦先生は、日本民

藝運動の主唱者であり、
日本の美術評論家、宗教
哲学者として著名な方
です。お二人の目黒のお
宅は現在「日本民芸館」
として公開されていま
す。その近くに五代友厚
のご子孫の方が今も住
んでおられることは、私
にとっては奇遇であり嬉しいことです。



日本民芸館 (Wikipedia)

五代友厚映画「天外者（てんがらもん）」（二
〇二〇）が封切られてから三年半を超えまし
た。今でも時々数日間とか一日だけの全国特
別上映会が行われています。私は十年近く前
に映画製作企画会議に参加していたことがあ
ります。その時の映画のキャッチフレーズ案
が「実もいらぬ、名もいらぬ、ただ未来へ」と
いうものでした。私はこの企画書を起案した
人は島崎藤村の「椰子の実」を好きな人だろ
うなと想像していました。

Dream 五代塾活動状況

◆第15回 Dream 五代塾セミナー実施
6月15日（土）定例セミナー（勉強会）
を開催した。（参加者13名）第5話「薩
摩藩英国留学生と五代のビジョン」

五代は、先君斉彬公の「富国」路線が
しばらく頓挫していたが、薩英戦争を機
に「五代才助上申書」として引き継ぎ藩
に上申、藩は欧州視察と英国留学案を受
理した。この実現には家老の小松帯刀の
尽力があったのは容易に推測できる。五代は
直ちに自身で企画し実行に移した。

渡航の目的は大きく二つ。一つは喫緊に必
要とする武器・機械類の購入、そして欧州全般
の視察である。欧州滞在は凡そ8ヶ月と短期
間で忙しい中、精力的に行動した。武器・紡績

機械類等の購入は新納・五代・堀を中心にイギ
リス国内で調達を終えた。そして将来必要と
なる文化・福祉・経済・産業面の視察（文化・
福祉施設として古物館、動物館、木草館、病院、
女院、養院、牢獄などの視察、製造事業では製
鉄、ニッケル、トタン、製紙、大砲、繊維製品、
ローソク、貨幣鑄造、ビール、砂糖、硝子、新
聞出版、電信、鉄道等々）にかけ、時には留
学生も同行させ、日本の近代産業の先駆けと
なる事業等を目に焼き付けてきた。

五代は滞欧中に薩摩藩庁に向け、ベルギー
との和親条約締結やベルギー商社設立（鹿児
島の鉱山開発や生糸、砂糖などの特産物の独
占的な輸出販売、さらに重機械の輸入・製造を
する合弁商社契約）、日本初参加となるパリ万
博出展などをふまえた上で、18ヶ条の提言を
一巻にまとめ送っている。（左記添付表）

その内の第3～5条では「商社合力」で出資
を募って会社を設立し事業に取り組むことを
提唱し、また、ドイツ連邦議会にならって諸藩
連邦を説くなど、日本国の近代化に照準を合

五代才助 献策十八箇条 要約

- 一、ベルギーとの和親条約締結のこと
- 一、ベルギー商社を設立すること
- 一、鹿児島で身分の高低を問わず商社開設すべきこと
- 一、商社合力でなければ大企業成り立ちがたいこと
- 一、諸大名同士が合力する商社を開くべきこと
- 一、日本において貿易を開始すること
- 一、ヨーロッパの形勢の把握
- 一、ドイツ列国に学び諸大名が集まり盟約を結ぶこと
- 一、皇国の全力をもって尽くさなければ大企業が成り立ちが
たいこと
- 一、フランス万国博覧会へ出品すべきこと
- 一、木綿紡績事業の商社を開設すべきこと
- 一、フランスへ蚕卵を輸出する商社を越前に開くべきこと
- 一、ヨーロッパから土質学の達人を招聘し鹿児島で資源を探
索すべきこと
- 一、罪人の死罪を免し職を与えるべきこと
- 一、養護院を開設すべきこと
- 一、各家老の専断事項を明確化しそれに委任すべきこと
- 一、諸役人を省力化し、海陸軍の専門化を図るべきこと
- 一、中国人、インド人を農業労働者として雇用すべきこと

わせた視点も、この建言には明確に現れてい
る。尚、社会制度などについては欧州で得られ
た見聞が各分野について表されている。
五代のもう一つの重要な任務は多様な人材
（身分・思想・役割・年齢等、帰国後すぐ藩政
を担う即戦力と長期的展望のもとに若年層を
混合）を選抜して欧州へ連れて行き、科学技術
の格差や軍事力の圧倒的な開きを実感させる
ことにあった。「百聞は一見に如かず」で「井
の中の蛙」の目を開かせることにあった。後の
留学生の活躍を見ると、大いに成果があった
と判断できる。（川口建）

◆第16回 Dream 五代塾セミナー予定

日時：8月17日（土）14時～16時（500円）
場所：川口宅 勉強内容・進行（川口建）
教材：「開学の祖 五代友厚小伝」（著者八木
孝昌・非売品） 18話の第6話「五代の
苦境と富国の使命棚上げ」

編集後記

「世界三大がっかり名所」といわれ
る場所を皆さんご存知でしょうか？
小便小僧（ベルギー）、人魚姫像（デ
ンマーク）、マーライオン像（シンガポール）を指すといわれ
ている。私は先日人魚姫像を観光し、なるほど！と納得し
てしまった！しかし観光客で賑わっている。不思議だ？

また、小便小僧は55cm程の小さな像であるがここも観光客が絶えない。
心と五代さんは欧州視察時に案内してもらったのだろうか？ まさかない
だろうが、もし対面したとすればその反応は想像もつかない。小便小僧の
由来は諸説あり「戦場の兵士を鼓舞する為、ゆりかごに幼い支配者を入れ
て木に吊るし敵軍に向かって小便をさせ、味方軍を勝利に導いた」という
説がある。ユーモアが組織の大きなパワーになる事は参考になる？ その
由来や本質を知ること「がっかり名所」にも合点がいき、地域の宝となり
観光資源となって大きなパワーになるものだと感じた。（川口由美子記）

（連絡先：川口建） Email: gogoken12345@gmail.com
Tel: 080-4497-5688 HP: <https://www.dream-godai.com>